

ウ 平地区

〈平下神谷、夏井川、平下大越〉

津波は河川延長65kmに及ぶ夏井川を数km溯上したが、広い河川敷を持ち津波を飲み込むことができたため、溢水することはなかった。また、河口付近で分岐し、海岸線に沿って北流する横川は一部溢水したものの、水田に通じる水門を閉じる措置により、大きな被害とならなかった。南側の平下大越では、海岸線に沿って夏井川から分岐する藤間川が溢水した。

下神谷字釜ノ前における津波の高さは6.57mであった。(図2-15)

〈平藤間、平下高久〉

平藤間の海岸には新舞子ビーチを控えている。同下高久はその南域、滑津川の南側までの海岸に沿った地域である。新舞子ビーチ付近は海水浴場であることから海との間は景観にも配慮して緩い階段状のビーチを構築していたため、津波はビーチを越え、海岸道路の県道豊間―四倉線を越え、藤間沼、新舞子公園に押し寄せたが、海岸線に沿っていたマツ林の防潮林が、その勢いとガレキを止めた。平藤間字鯨における津波の高さは5.08mを記録した。(図2-15、20)

津波はマツ林の外側、海岸線に並行する藤間川やこれにつながる水路を伝って広がり、水田に塩害をもたらした。(写真2-23、24)

河川敷を持たない滑津川は、津波の引込口となり、内陸に通じていた主要地方道小名浜―四倉線の手前まで溢水した。

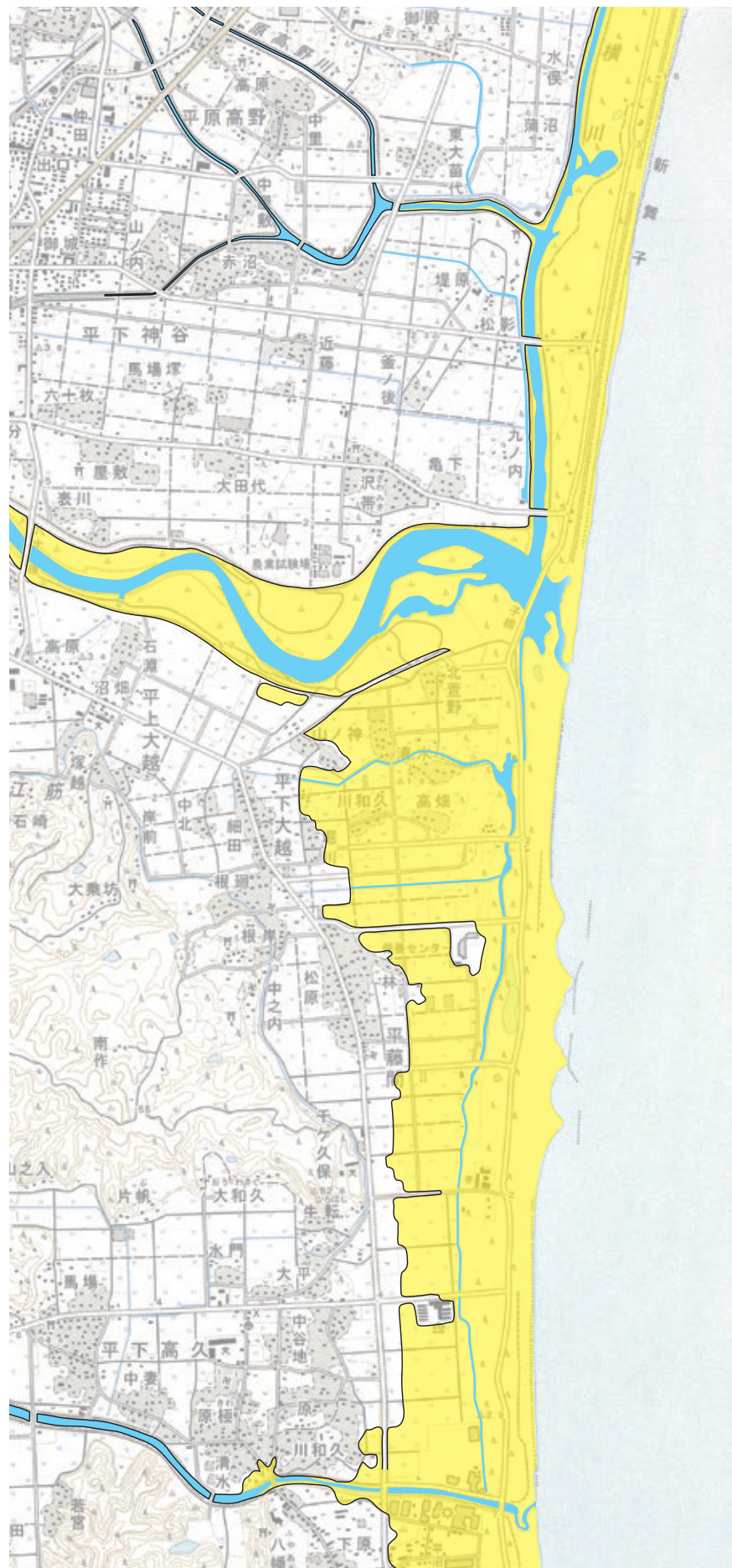


図2-20 平地区〔平下神谷・下大越・藤間・下高久、夏井川〕の津波到達範囲の概況図①
[1:25,000地形図(原寸×0.96) 平(平成18年更新) 国土地理院発行]

〈平沼ノ内〉

平沼ノ内では北側に砂浜海岸、南側に沼ノ内港が、それぞれ控えている。平沼ノ内の津波被災人口・世帯数は、262人、98世帯であった。

地区の中央を流れる弁天川は流域面積こそ小さいものの、直接津波が溯上して溢れ、流域の家屋を浸水した。沼ノ内字浜街では4.92mの高さで津波が記録された。沼ノ内港は被害を受けたものの、山を隔てた沼ノ内集落は背後に富神崎が控えていたことから、南東からの大きな津波を直接受けることはなかった。(写真2-25、図2-15、21)

半壊家屋(床上浸水)被害の割合が高く、27%を占めた。被害なしも19%であった。それでも全壊家屋(流出・撤去・条件付再生可)は39%に達した。

平沼ノ内地区においては、直接死で5人、関連死で4人が亡くなった。

〈平薄磯〉

平薄磯の津波被災人口・世帯数は、787人、283世帯であった。

富神崎と塩屋崎に囲まれた遠浅な海を控え、津波の高さは薄磯字中街で平豊間と並んで市内では最も高い8.51mを記録した。(図2-15)

南東から押し寄せた波が沖合の海底地形によって塩屋崎で分かれ、富神崎に跳ね返った波が塩屋崎で分かれたもう一方の波と湾中央の浅瀬で合流して波の高さが増したものと考えられる。遠浅の海岸であるため、防波堤を軽々と乗り越えて集落全部を飲み込み、ほとんどの家屋を破壊した。(図2-21)

全壊家屋(流出・撤去・条件付再生可)が87%と被害が大きく、しかも流失による全壊家屋は65%を占めた。

薄磯地区の被害は市内では最も多く、直接死で111人、関連死で4人が亡くなった。

唯一、集落の最も奥に位置していた豊間小学校の校舎はかろうじて難を逃れた。(写真2-26)

この被害の大きさに比して、塩屋崎北側の海食崖下では南東からの津波が直接押し寄せなかったこと、海岸が高い位置であること、により浸水被害はなかった。



写真2-25 富神崎を境に北側で被害の少ない沼ノ内、南側は大きな被害に遭った薄磯
[3月12日 福島県消防防災航空隊提供]

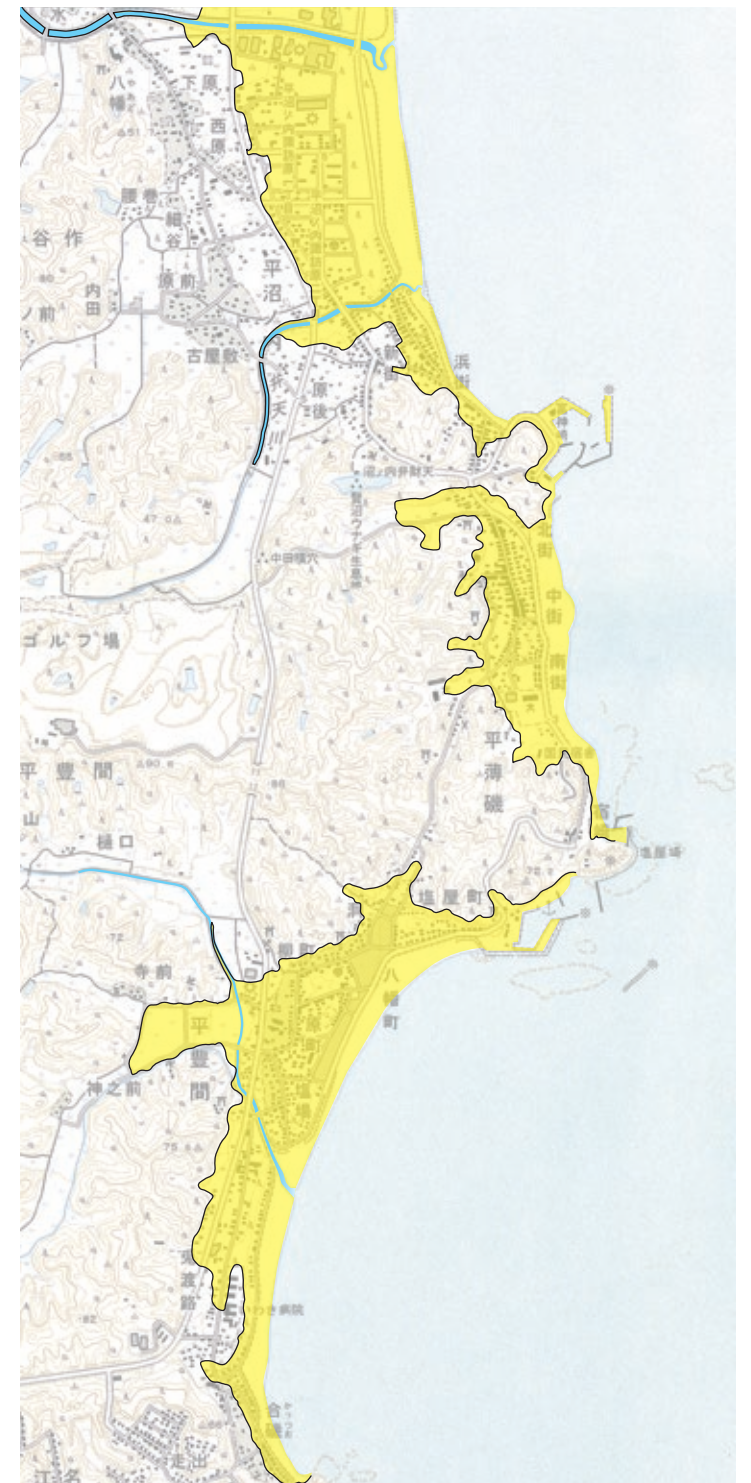


図2-21 平地区〔平沼ノ内・薄磯・豊間〕の津波到達範囲の概況図②
[1:25,000地形図(原寸×0.86) 平・小名浜(平成18年更新) 国土地理院発行]

〈平豊間〉
平薄磯と同様に遠浅の海岸で塩屋埼と合磯岬に囲まれた湾状の海岸沿いに集落が発達した地域であった。平豊間の津波被災人口・世帯数は、1,784人、641世帯であった。平豊間字下町において、市内最大の高さの津波となる8.57mを記録した。(図2-15、21)

塩屋埼沖の岩礁で押し返された津波がそのまま豊間海岸に回ったこと、合磯岬から回り込んだ津波が合流したことが家屋の多くを破壊して、大きな被害をもたらした。加えて、津波は海岸の中央を流れる諏訪川を駆け上り、集落奥の水田にも塩害を残した。(写真2-27、28)

海岸すぐ近くに位置する豊間中学校では部活動で30人ほどの生徒が残っていたが、教職員の誘導で津波が来る前に校舎西側の高台公園に避難した。

全壊家屋（流出・撤去・条件付再生可）が72％と被害が大きく、しかも流失による全壊家屋は44％を占めた。

平豊間地区においては、直接死で83人、関連死で6人が亡くなった。



写真2-26 壊滅的な被害を受けた薄磯集落
密集していた家屋が跡形もない。写真左手前の豊間小学校は奥まった地形に位置し、難を逃れた。〔3月12日 福島県消防防災航空隊提供〕



写真2-27 被害の大きさに呆然とたたずむ住民
〔3月12日 箱崎裕二氏提供〕

避難訓練のとおり高台の神社へ

2
震
災
の
記

小野 優子 氏

(常磐第二保育園←豊間保育園)

地震発生時、1～4歳児はお昼寝中でした。揺れが大きいので、子どもたちを着替えさせ園庭へ避難しました。消防団の方が、津波が来ることを知らせてくれたので、午後3時5分ころ、いつも避難訓練で行く八幡神社へ避難しました。

午後3時25分ころ、焦茶色の海の水が一気に押し寄せ、家がおもちゃのようにくると回ってぶつかるのが見えました。津波が引き、保育園を見ると、屋根までがれきで埋もれていました。怖いと泣いている子どももいましたが、普段と様子が違うことがわかるようで、食べ物がない、水がない、と不満を言う子どもはいませんでした。

夕方になって神社を出て、消防署分遣所や消防団の人たちに道路のガレキを取り除いてもらい、誘導されて午後5時半ごろ避難所の豊間小学校に着きました。

小学校には大人も避難していました。2階と3階の部屋に入りましたが、電気もつかず、暖房器具もなく、とても寒い状況でした。放課後児童クラブのおやつだったスティックパンを、一口ずつ食べました。廊下でろうそくをともしましたが、トイレが暗く携帯電話の灯りに頼りました。その後、小中学校の先生方がマットを運んでくれたので、子どもたちにカーテンをかけて寝かせました。毛布が届いたのは深夜でした。

翌朝6時ころから、保護者の皆さんが次々と迎えにきました。その後小学校が避難所として使用できないということになり、市が用意したバスで中央台東小学校へ移動しました。

豊間保育園は全壊したため、子どもたちは夏井や平などの保育所に分かれることになりましたが、みんな元気できてほしいと思います。元気でいればなんとかなると信じています。(平成24年2月取材)

エ 小名浜地区

〈江名字走出、江名港、折戸、中之作〉

江名字走出は、小さな湾を前にした集落である。津波被災人口・世帯数は、54人、25世帯であった。全壊家屋（流出・撤去・条件付再生可）が68％と被害が大きく、しかもすべてが流失家屋であった。(図2-22)

その南、江名港、折戸・中之作ともに海食崖が海に迫る間を縫って開かれた漁港が主体の集落である。津波被災人口・世帯数は、江名港が334人、136世帯、折戸・中之作が452人、183世帯であった。

中之作字須賀で5.07m、江名字江ノ浦で6.81mの高さで津波が襲った。(写真2-29、図2-15、22)

海岸沿いの家屋は被害を受けたが、沖防波堤などの港湾施設が津波の勢いを弱め、津波の高さに比して被害はさほど大きくならなかった。

江名港では一部損壊家屋（床下浸水）の場合が47％と高く、全壊家屋（流出・撤去・条件付再生可）は21％であった。折戸・中之作では56％と全壊家屋（流出・撤去・条件付再生可）の割合が高かったが、海岸を埋め立てて住宅化した折戸の被害が大きかったことが数字にあらわれた。

この地域では、江名地区においては、直接死で4人、関連死で2人、折戸地区においては、直接死で3人が、それぞれ亡くなった。



写真2-29 道路に横転した自動車を避けながら避難する住民（江名）
〔3月11日夕方 伊藤方美氏提供〕

〈永崎〉

永崎の津波被災人口・世帯数は、811人、301世帯であった。

永崎海水浴場を控え、景観に配慮した緩い階段状の海岸堤防を乗り越えて、津波は堤防内側の集落になだれ込んだ。さらに集落が堤防沿いの主要地方道小名浜―四倉線から低い位置にあり、加えて集落の中を流れる天神前川と大平川が津波を呼び込んだことから、狭い範囲で集落は二方からの津波に襲われることになった。(写真2-30、図2-23)



写真2-28 津波ガレキのなか、在りし日の日常を思い出させるぬいぐるみ（豊間）
〔4月23日 いわき市撮影〕

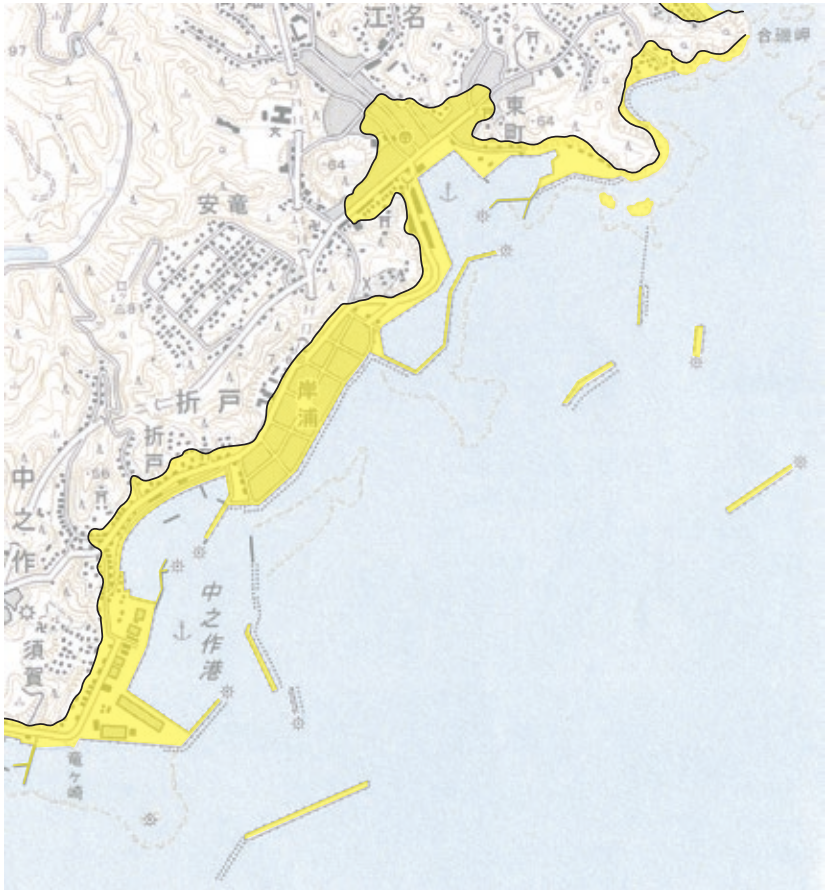


図2-22 小名浜地区〔江名、中之作〕の津波到達範囲の概況図①
〔1：25,000地形図（原寸×1.13）小名浜（平成18年更新） 国土地理院発行〕



写真2-30 大平川を溯上した津波は大平橋を破壊
〔4月23日 いわき市撮影〕

津波の高さは永崎字川畑^{かわばた}で5.38mであった。(図2-15)

津波の被害を受けた永崎小学校には、学童保育中の児童が20人ほど残っていたが、津波が来る前に、教職員の誘導で高台にある洋向台^{ようこうだい}の中央公園に避難した。

全壊家屋（流出・撤去・条件付再生可）が37％、大規模半壊家屋が18％、半壊家屋（床上浸水）が26％と被害の程度は分散した。

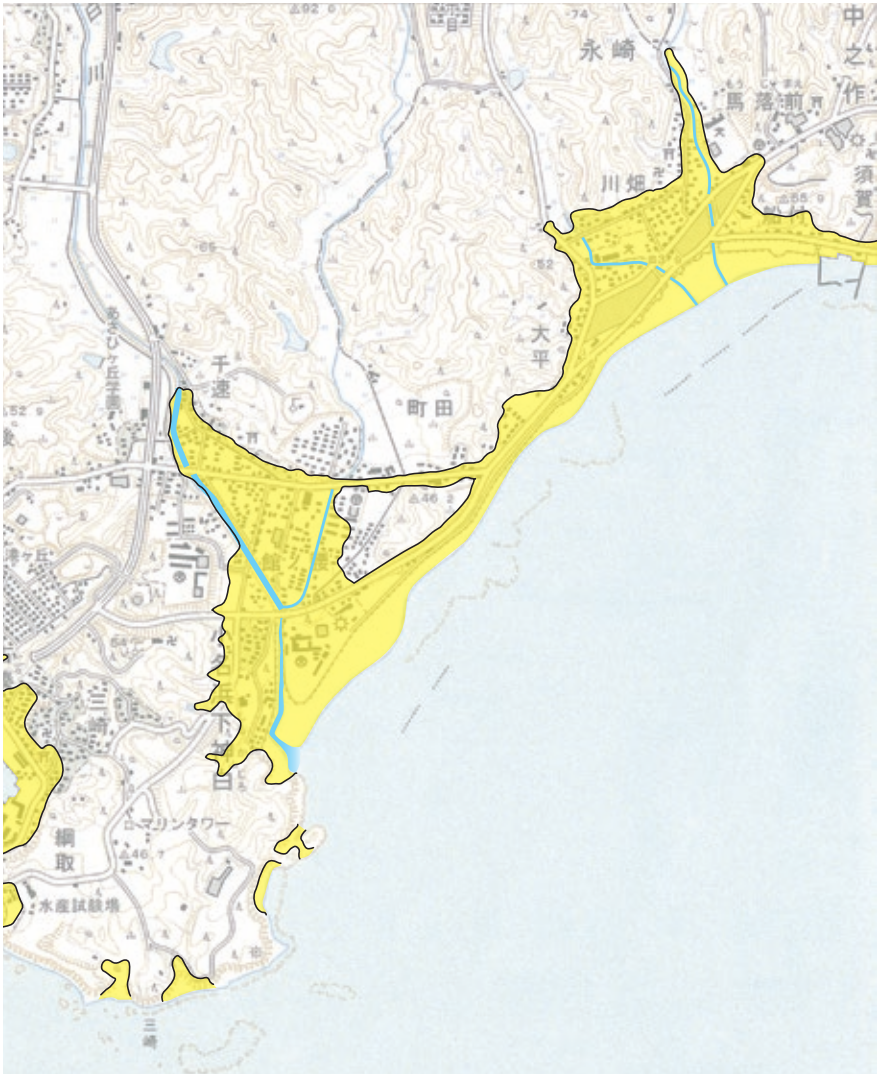


図2-23 小名浜地区〔永崎、小名浜下神白〕の津波到達範囲の概況図②
〔1：25,000地形図〈原寸×1.05〉 小名浜（平成18年更新） 国土地理院発行〕



写真2-31 職員の円滑な避難誘導で難を逃れた下神白保育所
〔4月23日 いわき市撮影〕

〈小名浜〉
^{おなばまこう}
小名浜港は南に向いた港であり、南東方向からの津波をまともに受ける恰好になったが、防波堤が幾重にも配置されているため、津波の速度や強さが弱められた。それでも複数の防波堤にぶつかった波は回転しながら直接「いわき・ら・ら・ミュウ」や「アクアマリンふくしま」などの沿岸の建物を襲い、大きな被害を出した。(写真2-32、図2-24) 津波は小名浜港の各埠頭を越え、その奥の工場地帯の一部も飲み込んだ。



図2-24 小名浜地区〔小名浜〕の津波到達範囲の概況図③ 〔1：25,000地形図〈原寸×0.92〉 小名浜（平成18年更新） 国土地理院発行〕

湾内に停留していた漁船や作業船などの多くも破壊されて、一部は陸に押し上げられた。

その一方でこれら建物が盾となって、市街地に流入した波の勢いは弱められ建物の大きな被害とはならなかった。しかし、低地に密集した市街地の公共施設や商店、事務所、一般家屋などに広く浸水の影響を与えた。(写真2-33)

また、港湾の一角に流れ込む小河川おながわの小名川は都市河川でもあるため、ここを溯上した津波も溢れ、市街地に広く及んだ。小名川につながる用水路の水も溢れながら溯上していった。

各埠頭では施設の損壊や関連道路、バース（岸壁）の亀裂・陥没などの被害が生じ、海上物流の機能が麻痺した。(写真2-34)

藤原川ふじわらがわを溯上した津波は工場地帯を抜け、矢田川やだがわとの合流先まで達した。

小名浜地区においては、直接死で2人、関連死で7人が亡くなった。



写真2-32 アクアマリンパークも大きな被害
〔3月25日 佐藤貴行氏提供〕



写真2-33 小名浜市街へ浸水する津波 〔3月11日午後3時50分ごろ 福島県消防防災航空隊提供〕

写真2-34 小名浜港5・6号埠頭先端の道路陥没
〔4月 常磐共同火力株式会社提供〕



〈泉町下川〉

泉町下川では剣岬つるぎみさきが海に突き出ているため、岬に南方から押し寄せた津波がぶつかり岬北側の工業団地の奥までは津波が来なかったが、それでも大剣埠頭や藤原埠頭では被害が生じた。壊滅的な被害を受けたのは南側に位置する「いわきサンマリーナ」であった。栈橋などの施設は破壊され、約150艇の係留ヨットも津波によって流された。

泉町下川字大畑おおはたにおける津波の高さは6.69mを記録した。(写真2-35、図2-15、25)

泉町下川地区においては、直接死で1人が亡くなった。



写真2-35 いわきサンマリーナに係留されていたヨット群を襲う津波
〔3月11日午後3時50分ごろ 福島県消防防災航空隊提供〕

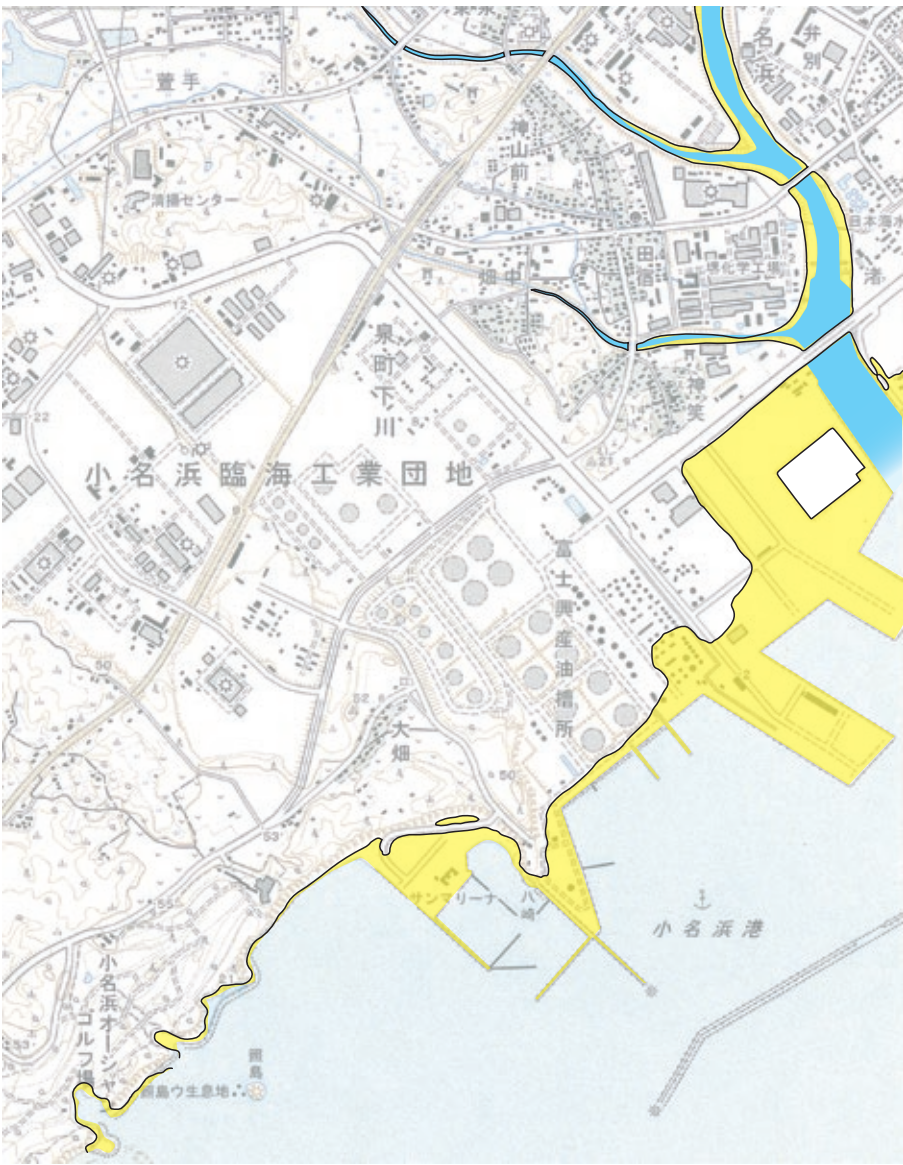


図2-25 小名浜地区〔泉町下川〕の津波到達範囲の概況図④
〔1：25,000地形図〈原寸〉 泉（平成18年更新） 国土地理院発行〕

オ 勿来地区

〈小浜町〉

竜宮岬りゅうぐうみさきと離れ山はなやまに囲まれた狭い湾に成立した小規模な漁港・小浜漁港は南に開いていることから、まともに津波の影響を受けることになった。津波被災人口・世帯数は、164人、56世帯であった。

漁業施設と集落が被害を受け、津波の高さは小浜町渚で7.1mに達した。(写真2-36、図2-15、26)

小浜では全壊家屋(流出・撤去・条件付再生可)が49%と高い割合を示した。大規模半壊家屋も19%を占めた。

小浜町においては、直接死で2人が亡くなった。



写真2-36 漁港から奥へ、県道を越える津波
〔3月11日午後3時45分ごろ 福島県消防防災航空隊提供〕